

刊行のことば

大著『平安朝歌合大成』（以後『歌合大成』と略称）が刊行されたのが一九五七年、その「増補新訂」版の刊行が一九五九年、それからでもすでに三〇年近くが経過している。その間、歌合資料の発掘はかなり進んでおり、これまであいまいな形でしか伝えられてこなかった、たとえば、長暦二年の二度にわたる源大納言歌合や、承暦二年の内裏歌合、大治元年撰政左大臣家歌合などは、原本である類聚歌合本文そのものが出現したし、何よりも古筆研究が進んで、新資料の蓄積は目を見張るほどである。

改めてここで、平安期の歌合、われわれが知りうる限りの歌合すべてについて、その本文を学界に提供しようとするものである。その際心がけたことは、可能な限り、原態のままの本文提供である。われわれはできるだけ手を加えない。たとえば『歌合大成』は、読者が理解しやすいように、適宜、仮名を漢字に改め、濁点を施し、仮名遣いもいわゆる歴史的仮名遣いに改めている。長文の序や判詞などの場合には、句読点はもちろん、カギ括弧まで施してある。利用者としてはまことに便利なことではあるが、しかしそれはしばしば重大な落とし穴にもなっている。仮名に漢字を当て、濁点を施し、カギ括弧を施すということは、その著者のひとつの解釈であり、それをそのまま受け入れるということは、決して学問的なことではないだろう。もう一度原資料に立ち返って、自分の目で内容を確かめたい。そのための本文提供は、忠実な翻刻に徹することである。読みは利用者任せることである。われわれは最低の基礎作業として、歌の上句と下句とを分け、長い文章に読点を施しはしたが、他は一切手をつけなかった。

もうひとつ心がけたことは、当然のことだが、われわれの手で新しい本文は作らないということである。特に平安朝の歌合は、十巻本にしる二十巻本にしる、いわゆる古筆切として切断されてしまっていることが非常に多い。先人達の筆跡

に対する愛着のなせるわざではあるが、結果として作品が分断され、完全な復元がむずかしいという問題が起こっている。その際、後世のいわゆる末流本文との混態本文は絶対に作らないということである。本集成は可能な限り断簡の集成はする。現在、確認できないものについては『歌合大成』の著者である萩谷朴氏のご遺族の許可を得て再録し、遺漏のないようにつとめた。しかし、歌合本文としてはたとえ不完全なものであっても古筆切は古筆切だけでまとめ、他に、たとえば群書類従本など後世の伝本がある場合でも、その混態本文は作らないことに撤した。後世の伝本は後世の伝本で、その全体像を示すものとして、まったく別個に掲げた。

それぞれの執筆は、おおむね『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー二〇一四年二月刊）の当該歌合の担当者にお願いした。編集・出版については、このたびも古典ライブラリーにお世話になった。企画から十余年を経てようやく刊行に至ったが、この間いろいろご配慮をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

二〇二四年五月

『歌合集成 平安編』編集委員会